

現象学の境目問題について美学の観点から答える

森 功次
(大妻女子大学)

本稿はワードマップ『現代現象学』に対する荒畑、鈴木、戸田山の三氏の書評論文への応答論文である。頂いた書評論文では、わたしの執筆箇所(第7章「芸術」および、コラム「現象学者たちの芸術論」)について、個別論点をとりあげての質問・反論はなかったが、ひとつ大きな質問を与えられた。それは鈴木からの「現象学の境界はどこにあるのか」という質問である(戸田山からの質問も、この質問と類比的にとらえることができるだろう)。本稿では、この質問に回答しつつ、わたしの執筆箇所に関していくつか補足的なことを述べたい。

1. 現象学の境目問題について

まず答えておきたいのは、現代現象学の境目はどこにあるのか、という問いに対してである。鈴木は「現代現象学とそれ以外の哲学分野は何によって境界づけられるのだろうか。ある研究が現代現象学の一部だと言えるためにもつべき特徴は何なのだろうか」と問うていた。

鈴木の言うように、この問いへの回答は執筆者間でも異なるだろう。われわれは数多くの検討会を重ね、そのなかで互いの現象学観をすり合わせてきたが、それでも見解が完全に一致しているわけではない。とりわけわたしは五人の執筆者のなかでは唯一フッサールの専門家ではない(博士論文のテーマは「前期サルトルの芸術哲学」だった)し、さらには研究分野も美学という若干別分野の人間であるから、わたしの現象学観はほかの執筆者とはかなり異なると思う。以下では、わたしの考えを述べることで、『現代現象学』の多面性(もしくは不整合)を明らかにしていきたい。

わたしは現象学というものを、ひとつの哲学的態度・スタイルのようなものとして理解している。この哲学的態度の中核的な特徴をどのように定めるかは厄介な問題なのであとに回すとして、まずはじわじわと外堀を埋めるやり方で、わたしの現象学観を説明していきたい。

まずわたしは、現象学を、始めたりやめたりできるものとして理解している。一人の論者が常に現象学をやっているわけではない。フッサールが書いたものだからといって、常に現象学であるわけではないだろう。この点に異論がある者はまずいないだろう。

次にわたしは、ひとつの論考の中に現象学をやっているところとそうでないところがあることも認める。たとえば、サルトルの『想像力の問題』などはそうした著作の典型例だ。『想像力の問題』でサルトルは、現象学的な考察と実験心理学に依拠する考察を、章ごとに意図的に使い分けている。また、評者の一人である戸田山の本『恐怖の哲学』にも、現象学を試みている箇所がある (pp. 51-54)。こうした著作について「これは現象学の本なのか」と問うやり方は、現象学かどうかを著作単位で判別しようとしている点で、わたしの現象学観にはあまりなじまない。さらにいえば、「現象学」という語をそのように著作・論考単位に当てはめていくやり方は、学問状況の理解としてあまり有益でないばかりか、哲学に余計な党派性をもたらす点で、好ましくないと思っている。わたしの印象では、現象学者たちの中には、〈(現象学をどう理解するかはさておき、その) 現象学の姿勢を最後まで取り続けないとその研究を現象学とは認めない〉とするような、狭い現象学観を持っている者も少なからずいるようなのだが、わたしはそのような現象学観はとらない。わたしの現象学観からすれば、一つの論考について〈最終的に現象学から離れていったとしても、ある部分では現象学をしていた〉と認めることは、なんらおかしいことではない。

さて『現代現象学』では、「現象学は、一人称的な観点から私たちの経験を探究することで世界を理解する」(p. 7) という特徴づけを出していた。このようにゆるい現象学理解をとったとき、戸田山や鈴木のように、現象学の領域が拡散してしまうのではないかと、といたくなる気持ちもよくわかる。いろんなものが現象学になってしまうのでは、という懸念はあるだろう。

たしかに、経験を見つめる作業をする哲学書の中にも、「現象学っぽい」著作と「現象学っぽくない」著作があるのは事実だ。サルトルの『想像力の問題』と戸田山の『恐怖の哲学』とを比べると、「現象学らしさ」にはかなりの差がある。とはいえ、わた

1. 『現代現象学』第一章で述べられたことでもあるが、「現象学者の数だけ現象学があり、現象学を一つのものとして定義するのは難しい」(p. 4)。

しの現象学観は、その差を説明できないわけではない。ただ、その現象学らしさをもたらししている要素をいくつか指摘すれば、判別は容易にできるだろう。

著作・論文に「現象学らしさ」をもたらす要素はいろいろと考えられる。〈経験を精緻に記述していること〉〈「エポケー」や「本質直観」といった現象学特有の用語を用いていること〉〈フッサールの著作に依拠していること〉などなど、いろんな要素が思いつく。加えて、〈最終的に認知科学的説明で問題を解決しないこと〉といった否定的条件のような要素も入ってくるかもしれない。いずれにせよ、これらの要素は、ある論考を現象学の論考にするための必要条件でも十分条件でもない、という点が重要だ²。これらはあくまで「一人称的な観点から私たちの経験を探究することで世界を理解する」という姿勢に伴いうる一つの特徴であり、それは現象学っぽい本に欠けていたり、現象学っぽくない本に含まれていたりするものだ。

「こっちは現象学の本だがこっちは現象学の本ではない」という判断は、実はこうした要素からもたらされる「現象学らしさ」の差を見分けているだけなのだ、と考えればいい。著作単位で現象学かどうかを無理に判定しようとするよりも、こちらの現象学観に立つほうが、現代における現象学の広がり多様性をうまく説明できるだろう³。さらにこの現象学観は、現象学かどうか判別し難い著作の、まさにそのボーダーライン性をうまく説明できる。先に挙げたサルトルの『想像力の問題』は、現象学かどうかのボーダーラインケースのひとつだとわたしは考えているが、それはある部分はフッサールを引きつつ、現象学の用語を用いて考察を進める一方で、別の部分では質問紙などをつうじて考察を進めているからだ。哲学方法論の多様化と、フッサールの大きな影響力をふまえると、20世紀以降の哲学書を読むさいには、〈これは現象学だがこっちは現象学ではない〉という党派的な線引きを設けるよりも、この著作はこの部分は現象学だがこの部分は現象学から逸れている、といった解析を丁寧にやっていくほうが、学問的作業としては生産的だろう。

そしてわたしは、現象学こそが正しい哲学的スタイルだとか、現象学から離れることで真理から遠ざかってしまう、などとも思っていない（『現代現象学』でも、哲学

2. ただし、ひとつ重要な意味で必要条件となりそうな要素がある。それは、その作業があくまで学問的作業としてやられている、という点だ。現象学はあくまで蓄積可能・共有可能な知見を積み重ねようとしている。その意味でいえば、先の「現象学は、一人称的な観点から私たちの経験を探究することで世界を理解する」というフレーズの中の、「理解する」という部分は実は重要なところなのだ。

3. こうした視点は、村田純一『色彩の哲学』最終章「生態学的現象学に向けて」にも見られるものである。村田はそこでギブソンの心理学を「現象学的観点」を具体的に実現している論者」として語っている（p. 260）。

者はみな現象学をやるべきだ、という主張は出されていないはずだ)。いったん現象学から離れることも悪くないし、さらにいえば現象学に戻ってこなくともいい。現象学的態度とは、あくまで答えを探っていくためのひとつの道でしかない、というのがわたしの考えだ。よってわたしは「それはもはや現象学ではない」という(現象学系の学会でたまに耳にする)発言で非難を含蓄するような現象学観には与しない。批判されるべきだとしたら、根拠のない臆見に依拠しているとか、不用意な推論をしてしまっているとか、過度の一般化をしているとか、先行研究の解釈に問題があるといった、別の面での学問的不備があるからだろう。現象学的であることそれ自体は、学問的価値を上げるわけでも下げるわけでもないのだ。

さらにわたしの現象学観には、もうひとつの特徴がある。それは、フッサール以前の仕事にも現象学的部分があることを認められる、というものだ。わたしはこれは、この現象学観の一つの魅力だと考えている。というのも、これにより「フッサール以前の現象学史」という観点から哲学史を見直す、という研究プロジェクトが可能になるからだ。わたしは現象学に関して、「フッサールという起源とそこから派生した運動」といった単系統群的定義⁴を取らなくてもいいと考えている。

この状況は、美学という学問の状況にも似ている。美学は18世紀にバウムガルテンが成立させた学問だと言われるが、バウムガルテン以前の論者(プラトン、アウグスティヌスなど)にも美学的考察を読み取ることは十分に可能だし、そのような美学観を採用している者は多い(じっさい美学の教科書は、たいていプラトンから始まる)。バウムガルテンの定義に固執し美学を「感性的認識の学」として厳密に理解する者からすれば⁵、このような美学観は誤ったものとなるのかもしれないが、現状の美学はむしろ領域や時代をフレキシブルに拡張し、多方面に発展している。現象学も、もはやそれと同じような状況といえないだろうか。

以上、わたしの現象学観の概略をおおまかに描いてきた。このように現象学をこのように曖昧に特徴づけることに、不満を持たれる方もいるだろう。現象学には何か中核的態度はないのだろうか。

4. この単系統群的定義という表現は、Davies (2015) から借りたものだ。デイヴィスはこの論文で、芸術の定義を提出するにあたって〈発端となる祖先とそこから分岐していく系統群〉として芸術をとらえる単系統群的説明(cladistic theory of art)を提案している。

5. とはいえ、この説明はやや単純化したものでもある。というのも、バウムガルテンは『美学』の冒頭で「美学」の定義を提出する際に、美学を「美しく思惟することの技術」とも説明しているからだ。バウムガルテンは美学を、学問の一種としてだけでなく、技術の一種としても構想していた。この点については、同箇所松尾大が付した詳細な訳注が参考になる。

もしかしたら多様な現象学運動をとりまとめる、なにか重要な中核的特徴が用意できるのかもしれない(わたしはその可能性は否定しない)。だがここで白状すると、「現象学とはまさにコレコレをやることである」というような、より具体的で本質主義的な説明を自信をもってできるような能力は、まだわたしにはない。むしろわたしは、この応答論文を書き出すまでは、現象学とは「経験をみつめることで世界や意識の本質的構造を探究しようとする学問的態度だ」という、かなりゆるい特徴づけしかもっていなかったと告白しよう(ここには、「現象学者たちの仕事の多様性を考えると、このようなゆるい特徴づけをするしかないかな」という諦めの気持ちもかなりある。勉強すればするほどよくわからなくなる、というあの感覚だ)。

ここでひとつお礼も兼ねて述べておくと、戸田山論文を読んだ今は、もう少し考えを改めて(緩めて)、戸田山の言う(7)「世界を理解・説明しようとするときに、できるかぎり「いま・ここ」にあるものだけを用いて、「いま・ここ」にないものの説明項としての援用を避けようとする、方法論的禁欲主義の一つ」という特徴づけにも少し魅力を感じている。というのも、現象学はつねに経験を見つめつづけるわけでもないからだ。ときには第三者的視点も考慮するし、他人から与えられる論証によって直観が変わることもあるだろう。既存の概念を利用することもまったくないわけではない。そういう点を含めると、「禁欲主義」という特徴づけは、悪くないようにわたしは感じているのだ⁶。現代現象学を特徴づけるにあたっては、「現象学は～する」という形ではなく、「現象学は～しようとする」という形で、努力目標の点から特徴づけをするほうがいいのかもかもしれない。

2. これはもはや現象学ではないのでは、という懸念について

前節までの議論は、いろんな研究が現象学になってしまうのでは、という懸念に答えるためのものであった。本節では、また別の側面からこの現代現象学の領域の曖昧さについて論じていきたい。以下では、現象学の特有性がなくなってしまうのでは、という懸念について考えていくことにしよう。この作業は「いったい[この議論は]

6. ただしこのような現象学観が戸田山のいう「素朴実在論」を帰結するものなのかは、まだよくわからない。というのも、現象学は意識に現れてくるさまざまなものを扱うが、そのすべてを実在するものとして扱うわけではないからだ(わたしはここで、夢や想像的対象についての現象学を念頭においている)。といっても、ここでわたしが「よくわからない」という曖昧な表現をつかっているのは、わたしが戸田山のいう「素朴実在論」をどのように理解すればいいのかまだ掴みきれていないというだけであって、戸田山に反対したいという何かはっきりした考えがあるわけではない。

どのような意味で現代現象学という分野に属するといえるのか」「もはやこれは分析哲学の議論なのではないか」という鈴木の質問に答える作業にもなる。

わたしは『現代現象学』で、次のように書いていた。

「あらかじめひとつ注意をしておこう。以下の議論には、フッサールに始まる古典的な現象学の著作には見当たらない議論も数多く含まれている。よって現象学に詳しい読者は、以下の説明を読みながら「これは現象学の話ではないのではないか」と思うかもしれない。だが本書がこうした説明の仕方を採用するのには、理由がある。「現象学」を広い意味で理解する本書の立場からすれば、現象学とは経験の観点から出発して考察を進める学問的姿勢であり、その意味でいえば、感性的経験について考察する美学は、その学問の性質上、必然的に本書のいう「現象学」に属するものとも言えるのだ。したがって以下の説明は、狭い意味での現象学にとどまらずに、美学一般に当てはまる議論が含まれることになる。あらゆる美学は現象学に関わる、これは本章の隠れた重要なメッセージである。」(213)

美学とは感性的判断・感性的経験について考察する学問であり、その感性的判断・経験の本質的部分を考えるにあたっては、自らの経験を反省的に分析する作業を避けては通れない。そのため、美学の歴史が、現象学と重なる部分が大きいのは当然である⁷。よって『現代現象学』ではまず、美学における伝統的な美的判断論をあるていどなぞるような書き方をした。

といっても、わたしは美学史をそのまま提示したわけではない。カントやヒュームの議論から現象学らしい論点は抜いてきたが、シェリングやヘーゲルのような、現象学的態度がほとんど見られないような論者の議論はもってこなかった。つまりこれは、美学史の中からあくまで経験に根ざす傾向の強い論点を紹介する、という方針である。

だがその一方で、わたしは『現代現象学』では、あえて古典的な現象学的美学の、いってみれば本流の論者たちの議論は、本文では紹介せずにコラムに追いやった。そこにあった隠れた——といっても詳しい人には一目瞭然かもしれない——モチベー

7. ブックフェア「今こそ事象そのものへ！ 現象学からはじめる書棚探索」への解説文でも述べたが、これはわたしのオリジナルの主張というわけではない。谷川渥がすでに次のように述べていた。「あらゆる美学は、その最も本質的な部分において、「現象学」なる言葉を用いようが用いまいが多かれ少なかれ現象学的記述を含むと考えることができる」（『美学の逆説』ちくま学芸文庫、2003年、104頁）。

ションについても、ここで明らかにしておくべきだろう（これは、7-2「美的経験、美的判断」の第6節「美的判断とそこに関わる個人的要素」でも示唆されていることだし、合評会当日にも私見として述べたことだ）。

わたしの見るところ、古典的な現象学的美学は、美的真理の本質を目指すアプローチをつよくとってきたように思う。その原因について、やや嫌な言い方をすれば、伝統的な現象学的美学は「芸術」や「美」という言葉に振り回されるきらいがあったのではないかとわたしは考えている（わたしはここでハルトマン『美学』やインガルデンの「美的体験」といった仕事を念頭に置いている⁸）。もちろん彼らの仕事が無駄だと言いたいわけではない。それは、美的経験一般に当てはまるいくつかの特徴を明らかにしている（知性や想像力が働くこと、真理経験との類似性、その経験に驚きや静謐さが伴うこと、などなど）。ただし、そうした分析が、美学史の上で非常に画期的な仕事だったかという点、わたしはあまり賛成できない。表現は多少異なるにせよ、似たような指摘は美学史の各所に見いだせるからだ。

よってわたしは、現代現象学の発展可能性を示すためには、限られた紙幅の中で古典的な議論をなぞるよりは、むしろちがうアプローチを提案したほうがいいのではないかと考えた。こうして『現代現象学』では、現代の（分析）美学の知見も交えつつ、「個人的・局所的な美的経験の分析」や「ネガティブな美的経験の分析」といった、いくつかの新しいアプローチを紹介していったのだ。これはもはや分析哲学の議論なのでは、と思われた要因はここにある。だがわたしはこうしたアプローチにこそ、現代現象学の観点が活かせるとも思っているのだ。

現代現象学は、狭い意味での「美」にとらわれがちであった古典的な現象学的美学を超えて、個々の経験をより細かく見つめる作業を練り上げることで、美学の新たな展望を開くことができる。そこでは現代芸術の多様化も考慮する必要があるし、日常のささいな美的経験に目を向ける必要もあるだろう。ワードマップシリーズの入門書的な性格をふまえれば、むしろこうした新しい方向性を提示していくべきではないか——。これが執筆時にわたしが考えていたことである。

もちろん、これについては別の見解があってもいいと思うし、入門書でこのように方針を限定することについては、もう少し批判があってもいいと思う。わたしとしても、このやり方は専門家から手厳しく怒られるだろうな、という覚悟で書いていたのだ（そのとき「無理に近年の動向をまとめるよりは、これからの研究者に向けて言い

8. このように普遍的・理想的な美的経験を論じようとするアプローチに対しては、近年ジェンダー美学の分野などから、「さまざまな美的経験を不当に一般化している」と批判がなされていることも思い出すべきだろう。

たいことをはっきり出したほうがいい」と背中を押してくれた共著者の方々には感謝している)。アンリやマリオンなどの議論を紹介しつつ、近年の「より現象学らしい」動向を紹介していく手もあったかもしれない。今となつては、『現代現象学』とは別の観点から、現象学的美学の可能性を語る本が出てくることをわたしは期待している。

まとめ

わたしは鈴木とは違って、現代現象学を「生まれたばかりの分野」だとも「分析哲学のライバル」とも考えていない。わたしは現代現象学を、古典的現象学からそこに必須と思われていた要素を薄めることで対象領域を拡張し、さまざまな分野に応用可能になった哲学分野だと考えている。そして、『現代現象学』で示してきたような態度は、哲学史の各所に見いだせるものだ。つまり、たしかに『現代現象学』のようなアプローチの書籍はこれまでになかったものかもしれないが、現代現象学的な試みはずっとあったのだ。われわれはただそれを切り出してきただけである。

また、われわれ執筆者は、『現代現象学』を書くにあたって、名著『ワードマップ 現代形而上学』を一つの目標としたが、だからといって、現代現象学が分析哲学のライバルとなるわけではない。そのふたつのアプローチは目的次第でフレキシブルに切り替えてよいし、作業としては重なる部分も出てくる（とりわけ美学という分野では大いに重なる）。どちらのアプローチも有益だし、片方が見えていないものを見せてくれるかもしれない。この二冊のワードマップは完全に別地域を描くものではない。やや種類が違う地図が増えることに、何ら問題はないのだ。

森功次

Norihide Mori

morinorihide@hotmail.com

参考文献

谷川渥『美学の逆説』筑摩書房、2003年

戸田山和久『恐怖の哲学：ホラーで人間を読む』NHK出版、2016年

アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテン『美学』松尾大訳、講談社、2016年

村田純一『色彩の哲学』岩波書店、2002年

Davies, Stephen (2015). Defining Art and Artworlds. *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 73 (4):375-384.